

沖縄協会だより



平和の絵—「戦争と平和」

20点連作—第16作

西村計雄 作

でいごの花 ふたたび

300号

175×304.5×6.5 cm

〈制作意図〉 沖縄戦ですべてが壊滅させられた沖縄、その中から逸早く芽ぶきたくましく根を張り、傷ついた人びとの心をいやし、ふたたび平和の灯をともした“でいごの花”は、県民の心を象徴する「県花」である。がっしりと大地に支えられた巨木「でいご」の花と、その花が運ぶ平和の風の中に、いのちの尊さを讃えあう二羽の鳩。この花は、もろもろの生物が息吹きはじめうるうずんの季節を深紅に彩る。また、すぐれた琉球漆器の好材として文化の花を咲かせている。でいごの花に託した“県民の心”と制作者の平和への希求が重ねられて表現されている。(昭和59年1月13日寄贈)

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)

東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・クリティック賞、勲三等瑞宝章、他受賞多数。北海道岩内郡共和町名誉町民、共和町立西村計雄記念美術館開館。2000年12月4日没。

沖縄
平和祈念堂
所蔵絵画紹介

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。



公益財団法人沖縄協会主催講演会

「日本における沖縄の重要性―歴史の視点から」

講師 高良 倉吉

琉球大学名誉教授 元沖縄県副知事

今回は沖縄協会講演会の再開第一回目の講師にご指名頂き感謝いたします。ご紹介いただきましたように、私は、九州・沖縄サミットが開催された2000年に沖縄大使をされていた野村会長のもとで、サミット参加国に沖縄に対する理解を深めていただくための講演をロシアとドイツで行いました。

本日お話しする内容は「日本における沖縄の重要性」です。このテーマには様々な切り口がありますが、沖縄の歴史を勉強している者として歴史の視点からお話しします。

最初に沖縄の歴史を、①「先史時代」(旧石器時代から鎌倉時代)、そして沖縄各地に大型グスクが登場した時期から薩摩軍侵攻(1609年)までの②「古琉球」と呼ばれる特徴的な時代、薩摩軍侵攻から琉球処分(1879年)までの③「近世」、沖縄県誕生から第二次世界大戦終結までを④「近代」、終戦後アメリカ統治の時代を経て日本復帰した⑤「戦後、現代」というように大きく5つに分けて認識し、この歴史の中で、そこから派生する特徴を説明します。まず、琉球の文化を作ってきた人々の主要なルーツは日本と同

じでありながら独自の歴史を形成したことです。そして島嶼という環境、東アジアという地理的環境を背景に周辺の大きな文明に影響を受けながら独自の文化を形成したこと。「琉球王国の成立と展開」を基幹とする歴史を形成したという点は日本国内の他の都道府県と大きく異なる特徴です。また、琉球王国が薩摩軍侵攻、琉球処分という二つの事件を契機に、段階的に日本社会に編成されたことが挙げられます。さらに沖縄戦、アメリカ直接統治、基地オキナワ、祖国復帰運動などを経験する過程でアイデンティティの問題を模索しました。日本から切り離されていたアメリカ統治時代に「一体我々は何者なのか」「日本とは沖縄にとって何なのか」という問いが浮上し、また、復帰後は日本の一員でありながらも「沖縄の我々」と「沖縄以外の彼ら」という「自己/他者意識」が沖縄の歴史の中に内在している、米軍基地問題などの現実の問題に向き合う際に「歴史問題」という形で顕在化するという特徴があります。このような歴史を踏まえながら今の沖縄、これからの沖縄を考えていくときに重要な論点は何か、私自身、常に自問自答しています。九州・沖縄サ

ミット開催の時にアジア太平洋地域の安全保障外交問題の専門家が集まる会議があり、主催者側から沖縄の立場から問題提起をしてほしいというお話がありましたので、私を含む研究者3人で「沖縄イニシアティブ」というレポートを発表しました。具体的な例として取り上げたのは基地問題です。沖縄県民からすると基地は銃剣とブルドーザーで強引に作られた場所であり事件・事故が発生して県民生活を脅かしている。しかし、日本の安全保障問題、日米安保体制の問題をロジカルに考え、歴史問題とは違うテーブルを用意して議論していくことが必要ではないかと申し上げたところ沖縄県内で批判を受けました。私たちの議論に至らない点もありましたが、私が一番強調したかったことは、沖縄の歴史を踏まえ、「自己/他者意識」を持つ地域に即しながら沖縄以外の日本国民と同じテーブルについて議論しようという視点や態度が大事であるということだと思います。歴史研究を通じて私が訴え続けた問題意識は、日本という国家は、沖縄を内包しつつ絶えず休むことなく形成され続けている。そして沖縄という存在は、日本に奥行きと難しさと同様様々な課題を提示

しているということでした。したがって沖縄は、その歴史的・文化的存在意義を發揮しながらも国家の形成に参画する責務を果たすべきなのです。また、近年の沖縄をめぐる動きのなかで、昨年8月に亡くなった翁長前知事が使ったキャッチフレーズ「イデオロギーからアイデンティティへ」に代表される「内向きの論理」を克服しなければならぬ、と私は考えます。日本国民と同じテーブルを囲んで我が国の米軍基地問題、安全保障体制、日米関係等を考えるときに沖縄のアイデンティティを強調すると他の都道府県のアイデンティティと共通ではないので問題が出てくるのではないのでしょうか。基地問題はアイデンティティではなく、イデオロギーに基づかないと議論できないと思っております。変動する世界の中で、基地問題を巡って日米関係の重要な接点となつていくのが沖縄です。そして尖閣諸島の問題を巡って日中関係の接点にもなつていく沖縄という地域は、日本にとつて重要な問題が交差している場所であり、日本の将来にとつて大きな役割を果たすことになっていくと考えています。(平成31年1月26日)

第40回 沖縄研究奨励賞贈呈式 受賞者記念講演要旨

沖縄協会は、平成31年1月24日「第40回沖縄研究奨励賞贈呈式」を開催した。今回受賞した自然科学部門の平良東紀琉球大学農学部教授、細川貴弘九州大学大学院理学研究院生物学部門助教、木下光関西大学環境都市工学部建築学科教授による受賞記念講演の要旨を紹介する。



第40回(平成30年度)沖縄研究奨励賞贈呈式

受賞者紹介(左より)細川貴弘氏、平良東紀氏、木下光氏



植物とカビと泡盛

琉球大学農学部 教授
平良 東紀

ヒトにとって微生物には2つの側面がある。一部の微生物は、ヒトやヒトが育てた農産物に病気を引き起こす。一部の微生物は、ヒトにとって役立つモノを作ってくれる。

農作物である植物の病原菌の約8割がカビと呼ばれる微生物である。植物はカビの攻撃から身を守るための武器を持っている。植物のキチン分解酵素はカビの細胞壁キチン(カニ・エビの固い殻の主成分)を分解することで、カビの侵入を防いでいる。我々は、沖縄に自生する様々な植物から本酵素を探索し、ガジユマル、パインナップル、リュウキュウイノモトソウ等から極めて強い抗カビ活性、高い安定性、新奇の構造を持つキチン分解酵素を発見した。現在、我々はこれら沖縄の生物遺伝子資源より得られたキチン分解酵素を抗カビ剤として応用するための研究を行っている。

沖縄の伝統的蒸留酒である泡盛は、黒麹菌という沖縄特有のカビの作用によって造られる。また、3年以上熟成させると芳醇な香りを持った古酒となるのも泡盛の特徴である。泡盛古酒の香り成分の中でも最も特徴的なのが甘い香りのバニラ香である。これまで、その生成過程は良く分かっていなかったが、我々は黒麹菌のゲノム情報や最新の遺伝子工学的手法を用いて、黒麹菌の持つ酵素(フェノール酸脱炭酸酵素)が、このバニラ香のもととなる物質を作っていることを突き止めた。本研究の応用は芳醇な香りを持つ泡盛古酒の醸造に役立つものである。

泡盛製造工程で出る泡盛蒸留粕は、その高栄養価から有効利用が期待されているが、独特の匂いと腐敗が早いことがネックとなっていた。我々は泡盛蒸留粕を特定の乳酸菌で発酵させることによって香りを改善した「新奇乳酸菌飲料」を泡盛酒造所と共同開発した。また、同発酵によって腐敗を抑制することで、泡盛蒸留粕を豚飼料として利用する技術を養豚農家と共同開発した。

今後とも、ヒトの害となるカビをやっつける研究とヒトの役に立つカビの研究を通じて、世界に発信できる基礎研究を行うと共に、沖縄県産資源を用いた新奇高機能性素材の開発を行っていききたい。

琉球列島の昆虫類に見られる必須共生細菌の多様性

九州大学大学院理学研究院 生物学部門 助教
細川 貴弘

多くの生物は微生物と共生しており、共生微生物に対して栄養分や安全な住み場所などを提供する見返りに、共生微生物からさまざまな利益を受けるという「相利共生」の関係を築いている。そのような生物の中には、共生微生物への依存度が非常に高く、共生微生物なしでは生きていけないものも少なくない。昆虫類は微生物との相利共生関係がとりわけ高度に発達しているグループである。植物の汁や脊椎動物の血液など、栄養分の偏った餌資源を利用する昆虫の大部分が体内

に共生微生物を保持しており、不足栄養分を共生微生物に供給してもらうことで生存が可能になっている。そのような昆虫のもっともユニークな特徴は、共生微生物を母親から子へと代々「垂直伝播」していること、そしてその結果、各昆虫種において特異的な一種の共生微生物が進化していることである。

ところが私は、チャバネアオカメムシの成長に必要な共生細菌には種内多型が見られ、6種もの共生細菌(以下では共生細菌A~Fと呼ぶ)が存在しているという前代未聞の現象を発見した。さらに興味深いことに、日本の本土地域のカメムシ集団には共生細菌Aを持つ個体しか存在していないのに対し、琉球列島のカメムシ集団には共生細菌B~Fのいずれかを持つ個体が混在していた。各共生細菌のゲノム解析やカメムシ体外での生存能力の調査から、共生細菌AとBは共生の歴史が比較的長く、共生細菌C~Fは共生の歴史が比較的短いと推測された。また、共生細菌C~Fはカメムシの体内だけでなく環

境中(土壌中や水中など)にも生息していることが確認された。琉球列島では、共生細菌Bを持つ一部のカメムシ個体の体内に共生細菌C~Fが侵入し、共生細菌Bに取って代わる「置換」が生じた結果、共生細菌の多型が生じたと考えられた。本研究の発見は、琉球列島の生物多様性のこれまで知られていなかった新しい側面と言えるだろう。琉球列島だけで共生細菌が多様化した要因を今後の研究で解明したい。

中村家住宅のひみつ 「琉球赤瓦の屋根に学ぶ」

関西大学環境都市工学部 建築学科 教授
木下 光

2007年八女市福島地区重要伝統的建造物群保存地区内の商家の屋根保全事業を契機として、吸水し、その形と組み合わせ方で通気・防水するという魅力をもつ瓦・瓦屋根の研究に着手した。素材である瓦の製法や瓦及びその下地を含む瓦屋根の性能を

再評価し、瓦を通して地域固有の家並みや風土的建築の再興に取り組むためである。

著書「中村家住宅のひみつ」琉球赤瓦の屋根に学ぶ「は、ケールルーフの観点から熱性能を高めた瓦の再構築」瓦及びその工法の開発研究の一環として行った国指定重要文化財中村家住宅の研究成果をまとめたものである。芸術家・瓦師奥原崇典氏の計らいで中村国宏氏との縁を得て、中村家及び関係者の皆さんの研究への理解と手厚い支援、さらには本の出版をご提案頂いたことが、この研究を導いている。

中村家住宅の価値とは何か、それは誰もが体感する心地よさである。現代住宅に劣るどころか、それ以上の環境性能を生み出すその建築を、瓦や屋根を中心として科学的かつ歴史・文化的観点から分析し、沖縄の伝統的住宅建築や集落が持つ固有性と普遍性への理解を高める一助となるように、わかりやすくQ&A方式でまとめた。本は、1章・敷地と家の構え、2章・赤瓦のつくり、3章・屋根の仕組み、4章・空気を動かす仕掛け、5章・集落のかたち、という構成になっている。中村家住宅と集落の関係性を大切に

たのは、まちづくり熱心に取り組み自治会や大城花咲翁会など大城地区の皆さんとの交流を通して、地域資源としてコミュニティを束ね象徴しながら、大城という固有の環境を中村家住宅が形態化していることに気づいたからである。共同研究者である関西大学宮崎ひろ志専任講師や都市設計研究室・建築環境工学第Ⅲ研究室と行った琉球赤瓦や漆喰をつくる職人へのインタビュー調査、詳細な屋根実測調査、熱環境測定調査がこの本を支えている。さらに本の概要を、中村家住宅内においてQRコードを用い日本語・英語・中国語で解説していることを付記しておきたい。



受賞記念講演

トピックス

沖繩協合理事会・評議員会について

平成31年3月12日、当協会は平成30年度第2回理事会・評議員会を沖繩県那覇市内のパシフィックホテル沖繩で開催した。議案は2019年度事業計画及び収支予算等で、野村一成会長他理事・評議員によって綿密に審議され承認を得た。

沖繩青少年勉学支援制度について

この制度は、本土(沖繩県以外の都道府県)で働きながら学ぶ沖繩青少年を支援し奨励するため、昭和48年に設置された。この制度に賛同いただいた沖繩出身者を含め多くの方々からの温かい寄附金でつくられた「働きながら学ぶ沖繩青少年支援基金」の運用により勉学支援金を給付し、これまで延べ1,129人の働きながら学ぶ青少年が支援を受け、習得した資格や技術を活かしてそれぞれの進路を歩んでいる。2019年度の応募は、4月1日〜6月30日まで、当日消印有効。

沖繩平和祈念堂改修工事に関するご寄付について

開堂から41周年を迎える沖繩平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

※詳細は「公益財団法人沖繩協会」のホームページより

沖繩平和祈念堂感想録

沖繩平和祈念堂には年間数多くの人々が訪れており、美と平和が織りなす空間で、心に感じた想いを記した感想録がある。その一部を紹介する。(平成30年度2月現在・61,633人)

72年前、おばあさんの家族は沖繩戦で亡くなりました。おばあさんは生きていた頃、沖繩戦の事をよく私達に言っていました。今でも覚えているおばあさんの言葉は「兄弟ケンカできる人がいいね」、その言葉は、私達兄弟がケンカしている時にいつも言われていました。今考えれば、おばあさんは72年前に兄弟を全員戦争で亡くしているの、私達がケンカしているのをうらやましく思ったのだと思います。優しいおばあさん・・・今年亡くなりましたが、おばあさんが最後まで願った戦争のない平和な世界、私も出来る限りの事をやって行きます。世界中の人々が平和な日が来る事を願います。 2017. (南城市大里在住)

2019年5月・6月に沖繩平和祈念堂で行われる慰霊・平和祈念行事

- 第39回こどもまつり「こども琉球芸能」 5月5日(日) 午後2時 開演(当協会主催行事)
- ぬちぬぐすーじさびらコンサートin摩文仁 第4回「モーツァルトレクイエムコンサート」 6月16日(日) 午後7時 開演(当協会共催行事)
- 2019年度沖繩全戦没者追悼式前夜祭 6月22日(土) 午後7時 開式(当協会主催行事)